

[漆工芸—東洋の輝き—展によせて]

## 蒔絵草花文提筆筒について

漆工芸の大きな特徴の一つは、鑑賞のためだけでなく実際に手に取り使用するために制作されているものが多い点にあります。皿・碗・杯といった食器類や、硯箱・文机といった文具類をはじめとして、身の回りの調度品の多くが漆によって美しく装飾されてきました。提筆筒もこうした身の回りにある調度品の一つで、携帯しやすいように天板に提手をつけた小筆筒のことをいいます。ここでは、漆で飾られた提筆筒の一例として大和文華館蔵の「蒔絵草花文提筆筒」(図1・図2)を紹介したいと思います。

長方形・片開きの扉をもち、天板に提輪、扉に蝶番と錠金具をつけ、内側には三段の引出が納められています。総体に黒漆を塗り、天板、側面、扉裏の六面には主に金平蒔絵によって草花文様が表されています。また引出の側面四面にも蒔絵が施されています。

各面の文様を見ますと、まず扉の表面には、松と橘の二本の木が配され、松の葉叢の上にある巢には鶴の雛たちが描かれています。雛たちの周りには餌を運ぶ親鶴がおり、また地面には亀も描かれています。松と橘は冬にも葉が落ちない常緑

樹であることから不老長寿や永遠性の象徴として古来より尊ばれてきました。鶴と亀もまた長寿の象徴であり、全体としてとてもお目出度い文様となっています。橘は花ではなく実がなっていることから、寒さの中で橘と松が青々とした葉を茂らせている冬の光景を表していると思われる。

扉の左面には大きなしだれ桜と二羽の鶯が描かれており、春爛漫の情景となっています。その左面には、大輪の花を咲かせる牡丹、葉をなびかせる菖蒲といった初夏の花々とそこへ群がる蝶たちが描かれています。さらにその右面(扉の右面)には、水辺に咲く菊・萩・女郎花などの秋草と山間の家屋が描写されています。このように箱の側面には、春夏秋冬を表すモチーフが各面に配されています。なお、提輪の付いた天板部分は、楓の下に二匹の鹿が戯れる秋の光景となっています。

次に扉を開け、中の引出を見ると、下段の引出には梅樹、中段には柳橋、上段には秋草の文様が蒔絵されています。

最後に扉の裏面ですが、そこには『万葉集』を代表する歌人である柿本人麿の姿が描かれています。

十世紀初めに編纂された最初の勅撰和歌集『古今和歌集』の仮名序において紀貫之が人麿を「歌の聖」と讃えていることもあり、数ある歌人の中で特に人麿は歌聖として尊ばれました。また人麿の画像(影)を掲げて供え物をし、歌会などを開く「人麿影供」という儀式によって人麿信仰はより広まり、人麿の画像が多く制作されることになりました。この人麿画像は大きく四つの系統に分けられており、その中でも有名なものが佐竹本三十六歌仙絵「柿本人麿」(出光美術館蔵・図3)に代表される、直衣・指貫・烏帽子姿で左手に紙、右手に筆を持つものです。本提筆筒の扉裏に描かれる人麿もこの伝統的な人麿像を踏襲しています。さらに人麿像の上部に注目しますと、蘆と舟が描かれる水辺の風景となっています。人麿の詠歌としては「ほのほのと明石の浦の朝霧に鳥がくれ行舟をしぞ思ふ」「梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば」の二首が殊に知られており、人麿像の背景には、舟のゆく海辺(明石の浦)の光景や、降り散る梅の花が描かれることがあります。提筆筒の人麿像に添えられた舟も「ほのほのと…」の和歌をイメージしたものとされます。

蒔絵が施された提筆筒には、側面や引出の文様を統一させるものも多いのですが、本作品では各面ごとに文様を替えているのが特徴的です。金平蒔絵を中心としながら青金(銀を混ぜ青味を帯びた金)・銀・絵梨地などを併せて用いるなど、華

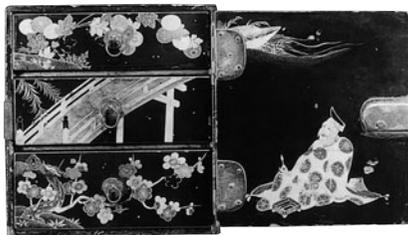
やかな装飾となっています。文様も樹木や草花が画面一杯にのびのびと表されており、桃山時代の絵画や工芸の持つ大らかな気分を感じることができます。各面の文様は様々ではありますが、扉裏には歌聖柿本人麿、箱の側面や引出の側面には四季折々の草花や鳥獣のように、和歌と関係深いモチーフがまとめられています。漆工芸においては、文字を意匠化して文様の中に入れ和歌を表現する、「歌絵」「蘆手絵」などと呼ばれる技法があります。例えば、「橘松竹鶴亀蒔絵硯箱」(北野天満宮蔵・図4)の蓋表には、橘・松・鶴・亀といった提筆筒の扉表と共通するモチーフが描かれていますが、この硯箱の蓋裏には「たちはなハ」などの文字が散らされており、『万葉集』に載る聖武天皇の和歌「橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常葉の樹」を表していることが分かります。本提筆筒には文字はなく、具体的な和歌を表現しているものではありませんが、四季折々に詠まれた和歌やその光景を思い起こさせるものとなり、作歌する際に使用する文房具、もしくは歌集・歌論書などを収めるために使用していたのではないかと想像されます。

(図3は『古今和歌集1100年記念祭 歌仙の饗宴』出光美術館2006年、図4は東京国立博物館編『工芸にみる古典文学意匠』紫紅社1980年より複製させて頂きました。宮崎も)

図1 蒔絵草花文提筆筒(扉閉)



図2 蒔絵草花文提筆筒(扉開)

図3 佐竹本三十六歌仙絵 柿本人麿(部分)  
(国宝・鎌倉時代・出光美術館蔵)図4 「橘松竹鶴亀蒔絵硯箱」  
(桃山時代・北野天満宮蔵)

季刊 美のたより No.154

平成18年4月1日

発行 大和文華館